

20240911 日本の食の未来に迫る危機、「気候危機」と「自給率」

夏休みに家族で群馬を訪れたときに、オーガニックの地元野菜をうりにしたレストランに立ち寄りました。レストランのレジの前に、トマトが入ったコンテナが、それこそ山積み置いてありました。真っ赤な美味しそうなトマトです。それが「レジ袋詰め放題 300 円」とかかれて売られていました。よく見ると、全て規格外でした。形が悪いもの、少し割れてしまっているものなどでした。せっかくだからと、一袋いただくことにしました。お店の人は、「まだ入るよ」「あと3個は入るよ」などと、笑顔ですすめてくださいました。袋からこぼれ落ちそうなトマトを抱えるようにして車に戻りました。自宅に帰って、さっそく、トマトサラダにしたり、冷製パスタのフレッシュトマトソースにしたりしていただきました。フルーツかと思うほどの香りと甘さでした。「このクオリティは何だ!」ととても驚きました。

お店の人は、

「暑くて、こんなのしかできないんですよ。」

と話されていました。

「こんなの？」

とんでもないことです。

トマトと言えば、小平の農家さんも去年はトマトがだめだったと話されていました。

前回話題にした埼玉県農家さんも同じことをおっしゃっていました。

「ああ、全国で、こんなことが起こっているんだな」と、悲しい気持ちになるとともに、何とかしなくちゃという気持ちになりました。

「ストップ温暖化!」は、この国でも本当に差し迫った問題です。

前回まで、農家の平均年齢 68 歳、頻発し深刻化する災害の危機、温暖化のリスクである高温障害、収入の低さ、そうした全てがこの国の農業を急速に「終わり」に向かわせている実態を話題にしてきました。

そして、それに並んで深刻なのは、「食物の自給率」です。現在 38%といわれています。この自給率というのは、「どこで生産されたものか」ということを示したものです。つまり日本人は、38%を国内で生産された食品を消費しているということです。その内、米はとても優秀で、ほぼ 100%が国産です。卵や牛

乳も 100%です。(チーズなどの乳製品はその限りではありませんが)

しかし、この数字の示す食物生産は、様々な条件が整っていることが前提です。そもそも米作りに絶対欠かせないのが、「農薬」「化学肥料」「燃料」です。これらほぼ全ては、完全に輸入に頼っています。野菜に関していえば、「種子」もほぼ 100%輸入です。畜産部門では、その「飼料」はほぼ外国産です。

農業に必須の「農薬」「化学肥料」「燃料」のどれか一つでも欠けてしまったら、この国の農業は、その時点で終わります。生産することができなくなるのです。何の対策もとらずにいたら、その年のうちに、この国は飢餓列島になります。そして、いったん荒れた土地は、次の年、これまでのような実りは期待できません。国際的な緊急支援を受けることになるでしょう。

そうならないための、またはそうなってしまった時の対策については、残念ながら聞いたことがありません。「化学肥料」から「自然の肥料」への転換は、スリランカが国家的プロジェクトとして行いましたが、見事に失敗したことは、以前ブログ(ブログ②:「化学肥料をやめたら・・・スリランカの国家的挑戦」)でも紹介しました。持続可能な農業、日本国民が飢えずにすむためにどうしたらよいか、このことは、農家の高齢化・後継者問題とともに、真剣に考えていくべき問題だと思います。

ひとつ絶対言えることは、外国との関係を良好に保ち、平和で協力的な国際社会を維持・発展させることです。困った国があったら手を差し伸べ合い、支え合う、思想、宗教、信条、人種、過去からのしがらみ、・・・国を超えて人間として結び合い助け合う、そんな国際社会をつくっていくことが大切ではないかと考えます。これは、一部のエリートの指導によってなされるという発想では、うまくいかないと思います。限りなく迂遠に感じるかもしれませんが、一人一人が地球市民として立ち上がり、絆を結んでいくしかないと考えます。市民レベルの意識改革、意識深化が最も重要だと考えます。そのために、教育の力は決して無力ではないし、教育の使命は限りなく深いと、強く思います。